# 喫茶店文芸

2021年6月号

今月のお題

## 裏切り

Betrayal

*Et tū, Brūte?*

# 喫茶店文芸 2021年6月号――目次

福原大輝　花は無口なままで　1

ほろほろほろろ　はじけて♪ ボムっ娘アカリちゃん！　9

平田　ヘイデン　コンパニオンバード　13

制作・著作　MHK総合　密着ドキュメンタリー番組

テレビ文章　天野満　『テラの西日』（活字版）　17

福原大輝
花は無口なままで

花は無口なままで福原大輝

ピアノの伴奏が流れ始めて、聞いたことのあるメロディが何の引っかかりもなく右耳から左耳へと抜けていく。高辻修介はさぼっていると思われぬように、周りに合わせて口を開いた。この曲が「あおげばとうとし」なのは知っているが、歌詞はあまり知らない。横から聞こえる歌声に、記憶の隅が刺激されることもない。

小学生のときだったら歌を真面目に歌っていたし、その上で感動していたかもしれない。しかしながら、この歳ではそうはいかなかった。大学入試の前期試験の結果が来週にようやく発表される。それに落ちたならば次に後期試験が待っていた。そんな状況にある高辻は我が身を案じて、式に集中できるはずもないし、感動するはずもなかった。

みんな同じ気持ちだろうと、同意を求めるように周囲を見やった。いや、その前にすぐ右隣の異変に気がついた。

大石和哉。彼とは中学からの同級生だ。彼は両目から一筋ずつ涙を流し、歌っていた。たしかに思い返すと、彼は中学の卒業式でも泣いていたかもしれない。いったいどうして彼は感動できるのだろうか。

歌が終われば卒業生退場とアナウンスがあり、高辻たちは体育館の外へと出た。だが、まだ終わらなかった。クラスでは一人一人が前へ出て一言ずつ、いや、何言も挨拶をして、全く進まなかった。そして学級委員が一年の思い出をまとめた動画を流し始めた。ご苦労なことだ。

最後に、担任の中隈が本当に一言だけ、がんばれ、と無感情に言った。それはまさに「ロボット」の異名をもつ彼にふさわしい最後の言葉だった。感情を失ったロボットの目の奥はいつも暗かった。感動ムードの中、ロボットの淡泊さに絶句する女子生徒や保護者がいたが、高辻はそれでいいんだ、と心の中で言った。さっさとこんなこと終わらせて家に帰りましょう、先生。その言葉が通じたかのように中隈は通信簿を持って教室を出て行った。こうして、ようやく卒業式の全工程が終わりだ。

その後、クラスのやつらは写真を撮り合ったり、アルバムを開いて寄せ書きをしたりしていた。そんなものには目もくれず、高辻は帰り支度を始めた。今日でみんな離れ離れになるわけではあるまい。明日から後期試験へ向けての対策授業が始まるのだから。

帰り支度が済んで、教室の扉を開けたそのときだった。見覚えのある女子がすれ違いに入ってきた。一瞬目が合って識別に時間がかかり、高辻はその間立ち止まっていた。彼女は大石を呼び、彼の机に近づいていった。その様子を見て、何となく誰なのかがわかった。彼女は大石に何か言い、二人は教室の外へと出て行く。扉の前ですれ違うときに、大石とも目が合い、不審に思った高辻は後を追った。

二人が向かったのは、人目のつかぬ部室棟の裏だった。困ったことになったと高辻は少し焦ってきた。大石が女子となんか始めるのかもしれない。本当にそうだったら高辻はなぜついてきたのだろうかと自分を責めた。そんなことを考えていると、突然に大石と女子が立ち止まったので、高辻は慌てて物陰に隠れる。暗い緑のロッカーに足をぶつけたが、どうにか声をこらえた。

その女子—広川美佐も中学からの同級生だった。いや、小学校も同じだったのかもしれないがわからない。久々に見たのだが、その猫のような目は憶えていた。そんな彼女は前触れもなく怒鳴った。

「高辻！　出てきなさい！」

驚きで声が漏れた高辻は観念して、物陰から二人の元へと出て行く。

「なんだよ。気づいてたのかよ」

「バレバレ」

大石もにやにやと笑っている。さっきは泣いて、今度は笑って忙しいやつだと高辻は思った。

「俺を呼んだということは、なんだ。そういうのじゃないのか？」

「何を期待してたの？のぞき野郎！」

「じゃあ、なんだってんだよ」

容赦のない美佐に、高辻はもはや悪びれもせず居直って、言葉をうながした。彼女は一度大石を見て、ポケットからメモ用紙を取り出した。

大石がそれを受け取り、高辻は覗き込んだ。

「なんて書いてあるんだ？」

「ヨウリン、ヨウド、ベジフル……なんだろう？」

首をかしげる高辻たちを見かねて美佐が口を挟んだ。

「園芸の道具よ。肥料とかに使うの」

へえ、と高辻は言うが、興味もない。それを一瞥してから美佐は訊いた。

「誰のメモかわかる？」

さあ、と首を振る高辻のとなりで大石は答えた。

「中隈先生の筆跡だね」

「なんでわかるんだよ」

板書を見ているからだよ、と大石は笑った。高辻はメモを近くで見てみるがロボットの筆跡かは分からなかった。その筆跡が特徴的だと思ったことはないから。

大石は気味が悪い程の観察眼を持っている。そのことを、高辻は知っているから驚かないが、やはり気味が悪い。ただ、と大石は美佐を見た。

「この『ジョウロ』っていうのは、なんとなく筆跡が違う気がする」

「そうかしら。気にならないけど」

美佐が食い入るように言ったためか、大石はなるほどと言って、あっさり引き下がった。

「この紙がどうしたの？」と大石は美佐に訊いた。

「大石君はこないだの中隈先生の件、気になっていないの？」

確かに不思議なことがあった、と高辻でも思い出せる。あれは卒業式の三日前のことだった。感情を持たないロボットとして知られる我が担任の中隈が、感情をあらわにしたのだ。そしてそのようやく見せた感情が「怒」だった。それも、校長に対して。

登校時、たくさんの生徒が見ている前で、花壇の隅に立っていたのは校長と中隈だった。怒鳴っているのだが、何と言っているのか生徒にはわからなかった。だが、怖いもの見たさで皆が目を離すことはなく、周囲は闘技場のような異様な空間になっていた。

「卒業式でしょうが！」

その言葉だけがはっきりと聞こえて、高辻たち三年生は思わず

目を向けた。どうやら自分たちに関係しているのだろう。ただ、その直後に中隈はその場を離れていったので、怒った理由はわからないままだった。
美佐はその中隈のメモを指さした。
「これが真相につながると思うの」
本当にそうなのだろうか。高辻が考えている間に大石はさわやかに言った。
「わかった。やってみよう」
「なんでだよ！勉強はいいのかよ！」
今度は高辻が怒鳴ることになったが、大石はすでにメモ用紙をじっくりと見つめていた。賢い大石なら解けるはずだと意識を休めた瞬間、目が合った美佐に再び怒鳴られた。
「高辻、あんたも手伝いなさいよ！」
なんでだよ、と高辻はもう一度叫んだ。

次の日、後期入試のための対策授業がすでに始まっていた。その夕方に高辻と大石は男二人で中庭の花壇を見つめていた。花は卒業式が終わった後も咲き誇り、パンジーやナズナが小さな風を受けて揺れていた。
高辻は溜息と同時に言った。
「花を見ててもわからんな」
「たしかに。だけどそろそろ現れるはず」
「だれが？」
高辻が大石を見るとすでにその視線はこちらを向いていなかった。
「校長先生！」
大石が呼ぶ先には、日よけ帽子をかぶった校長が、手を後ろに組み歩いてきていた。見た目はよぼよぼとした老人だが、足取りはしっかりとしている。
大石はどうしてか先生たちの予定を知っているらしい。
校長はゆっくりと高辻たちに近寄り、一緒に並んで花壇を眺めた。
「どうしたのかね」
「先生、この前中隈先生と何か言い合っていませんでしたか？」
大石は単刀直入だったが、校長は驚くことはなかった。
「たしかに。あれは怒らせてしまったよ」
「校長先生が怒らせたのですか？」
校長は首を捻って考える。
「わざと怒らせようとしたわけじゃないんだがね。私が彼に相談しなかったのがわるかったんだ」
「相談？」
「そうか、君たちは中隈君が花壇の担当であることを知らんのか」
たしかに意外な事実だったが、あのメモを見ているからか納得感はあった。だが、大石は知らない体で訊き返した。
「そうなんですか？」
「朝早く登校する子なら知っているが、彼は朝から水やりをしているよ。それ以外の時間は私がやっているのだが」
なるほど、と大石は相槌を打つが、その後首を捻った。
「それと怒られたのはどういう関係が？」
そうだね、と校長はおもむろに歩き始めたので二人はついてい

く。中庭にはたくさんの花壇がある。
「彼はね、花壇に植える花を決めているんだ。私は、その方針に背いて花を植えようとしたんだ」
校長は別の花壇の前で足を止めた。
「ちょうどここだ」
目の前の花壇はまだ何に花もなかった。植えられる前の、ならしてある土があった。そこには何も植えられていないが、血色のいい土が広がっていた。
「私はここにベルフラワーを植えようとしたんだ」
「ベルフラワー？」と高辻は訊いた。
「校章に使われている花ですね」
大石の答えに、なんでわかるんだよ、と高辻は心の中で言った。
校長はうなずいて、大石のブレザーの胸についている校章を指さした。紫の小さな花が三つついていて、それを包むように黄色の輪が描かれている。
「そう、だから私はこの花を植えたいと思ったんだ。せっかくの学校の花なのに、この広い校舎にないからな」
「だけど中隈先生は怒った」
「そう。花言葉がよくないらしいんだ。それで怒られてしもうた」
「はあ」
大石は携帯電話を取り出して調べてみると「感謝」とあった。それを高辻も覗き込んで見ていた。
「感謝はいい言葉だよな」
「うん」
「私も調べてみたんだがわからんかった」
校長は明らかに困った顔をしていた。
「ここには例年通りの花を植えようと思っているよ。彼の逆鱗に触れぬように」
「それがいいですね。ありがとうございました」
大石は快活に言って頭を下げた。手を振る校長と別れて、高辻はつぶやいた。
「あのロボ教師と花言葉か。似合わねえな」
その後、二人は携帯電話を片手に広い校内の花々を調べて、その花言葉をメモしていった。その中には「感謝」を意味する、ガーベラの花もあった。
「どうしてベルフラワーだけがないんだろう」
確かに不思議な事だった。この広い校内には数多くの種類の花が植えられているというのに、校章のベルフラワーがないというのはおかしなことだった。頭脳明晰な大石でもわかっていないのか、ベルフラワーだけがない、と繰り返し念仏のように言いながら歩いた。
西日が傾いてきて、花を照らす光がその色を変えていく。
不意に開いたインターネットのページ上で、高辻はその花の違う色を見つけた。
「後悔？」
突然、高辻の中であることが思い浮かんだ。

高辻と大石は、部室棟の裏で待っていた。
すると、「なんかわかったの？」と美佐は鼻息荒く登場した。
「高辻から訊こう」

大石が手を向けると、美佐はかなり嫌な顔をしたが、渋々といった感じで高辻を見た。
高辻は校長から聞いた話をかいつまんで説明した。中隈が花壇の担当だということに美佐は驚くかと思ったが、片眉を上げただけだった。
そして高辻は、そのときの言い合いの原因はこのベルフラワーだ、とこれ見よがしに自分の校章を指さした。昨日まで知らなかったくせに。
「この花言葉は、感謝、だ」
「いいじゃない。じゃあなんで怒ったの？」
美佐は当然の疑問を口にした。
「そうなんだよ。他の花壇にも花言葉が『感謝』の花はある」
だけど、と言葉を切って、高辻は少しもったいぶった。推理を話すというのは、焦らして話を進めなくてはならないようだ。
「おかしな話だ。この学校にはベルフラワーの花がどこにもない。校章になっているのに」
「たしかに、ベルフラワーだけがなかった」と大石はうなずいた。
「だから、校長が植えたくなる気持ちはわかる。でもそれを中隈は感情を出して否定したんだ」
「なんで？」と美佐はもう一度繰り返した。
「そう、もしかしたら中隈はベルフラワーを植えないことを意識的にしている可能性があると俺は考えた」
再び美佐は片眉を上げたが、高辻は続けた。
「実はベルフラワーにはネガティブな意味の花言葉もあって、後悔、という意味もあったんだ」
「だから？」と美佐が後をうながしたので、高辻は早口にならないように呼吸を整えた。
「つまり、中隈がしていたのは、花言葉を否定することだ。『後悔』するな、というのが中隈から俺達たち卒業生へのメッセージだったんだ」
一気に言い切ってしまうと、美佐にしては初めて高辻の言葉に表情を変えた。
「ふーん、なるほどね……」
「ベルフラワーだけがない、というのはそんな意味があったんだね」と大石。
「やるじゃん。高辻」
二人は高辻の言ったことを徐々に飲み込めてきたのか、顔が明るくなってくる。
「ひねくれ者の高辻だからわかったんだね」
「なんだって！」
「ま、そのおかげでわかったならいいか」
そう言って、突然に美佐は笑い始めた。大石も笑い、高辻はそんな二人をにらみつけた。
「じゃ、二人とも仲良くね」
美佐は唐突にそう言って、帰っていく。
「こんな奴と一緒にいるかよ」
その背中に高辻は言ったが、美佐はもう振り返らなかった。ちょうど、後悔しない、を表すかのように。もうすでに美佐は制服を着ていなかった。確か美佐は推薦かなんかで合格が決まって、後期試験の対策授業は受けないのだろう。学校に用はないというこ

とだ。
美佐が行ってしまうと大石は溜息を付いて、何かを観念したかのように笑った。
「僕たちはあの子に振り回されたな」
「何のことだ？」
大石は一呼吸置いた。
「彼女は全部わかった上で僕たちを呼んだんだ。僕たちは騙されたんだ」
騙された、と言いつつも、大石は明らかに騙された顔などしていなかった。どこかすがすがしいような、だけど寂しいようなそんな顔だった。大石は表情を隠せない。それを知りながらも高辻は、自身の中の違和感を解決することができずにいた。
「どういうことなんだ。だとしたら、どういう目的でこういうことを？」
「さあね」
その悟り切ったような顔に、お前だって俺を騙しているんじゃないのか、と高辻は言いたかった。
高辻は自身の推理が正しいとは思っていなかった。理屈が無理に通るようにこじつけただけで、寧ろ間違いなのではないかと思うほどだった。
しかし、真相をあえて中隈に確認することはしない。ロボットは感情をあらわにしたことを、ほじくり返されたくはないだろう。
一番の謎は同級生の二人だった。
高辻が考えたこじつけの推理を聞いて二人は喜んだ。普段は考えられないくらいに異様にわざとらしく。とくに、美佐なんかは高辻の話など聞きたがらないだろう。
さらに、美佐は全てをわかった上で、俺たちを呼んだのだと、大石は言った。だったら何のための推理だったのか。美佐の目的はなんだったのか。
――ベルフラワーだけがない。
実際、高辻はあの呪文を唱えていた大石にヒントを得て、問題を解いたようなものだ。だから実は大石も答えを知っていて、意図的に高辻を導いて答えを引き出したのではないか、とも考えられた。
いったい二人は何を考えているのか。
高辻は、いろいろ考え過ぎた結果、柄でもないことを想像し始めた。
花は季節が過ぎれば散っていく。何も残さないまま、何の後悔もないままに。花は無口まままで何も伝えずに、消えていく。中隈も美佐も、まるで花と同じだった。本当のことを言わずにどこかへ行ってしまう。
彼女は何も言わないまま帰っていった。それを追いかけることもしなかった。俺も大石も。追いかけて、なんて花たちは言わないから。
――でも、なんかさびしかったんだろうな。
自分の想像がばかばかしくなって、高辻は吐き気を催していた。
そんなことしらんと、自身にツッコミを入れて、ようやく高辻は現実に戻ってきた。とにかく今は試験に集中だ。だが、試験の対策授業も終わったら、あいつらとも会わなくなるし、こんなバ

カな考えをする事もなくなるのか……。
――まあ、別にどうだっていいか。
やがて高辻は後期試験を受けることもなく、大学に入学した。また新しい場所へと進んでいくのだった。その庭で、見知った誰かと再び同じ花を見ることになるとは夢にも思っていなかったが、それはまた別の話で。

ほろほろほろろ
はじけて♪
ボムっ娘アカリちゃん！

皆さん初めまして！わたしの名前は赤星アカリ。元気印な女の子！

今日はね、なんと中学校の入学式なの！わたし、今日からピカピカ中学一年生になるんだ！新しい通学路。新しい校舎。新しい環境。たくさんの『初めて』が満ち溢れていて、胸がドキドキワクワクで一杯だよ。でもね、ちょっとだけ不安かも。友達ちゃんとできるかな？

ううん、弱気になっちゃだめ！元気がわたしの唯一の取り柄なんだから。沢山話しかけて、たっくさん笑顔になれば、友達百人なんてあっという間だよね！

早速制服に着替えちゃおう。服装が変わっただけなのに、なんだか急にお姉さんになったみたい！それにこの制服、とってもカワイイ！胸元のリボンもチェックのスカートも、とってもオシャレで良いカンジ。よーし、気分が上がってきたよ！

弾むような足取りで玄関へ。扉を押し開けながら、笑顔いっぱいで振り向いて、

「おかーさん！　行ってきまーす！」

すると、奥からお母さんがひょっこり顔を出してきた。なんだかちょっと不安そうな表情。どうしたのかな？

「アカリ、一人で大丈夫？折角だからシヨリくんと一緒に行ったら？お母さん、まだ支度できてないから一緒に行けないの」

シヨリくんはわたしの幼馴染。ぶっきらぼうでちょっとガサツだけど、カッコイイところもあるの。

お母さんが急にシヨリくんの名前を出すんだもん、ちょっとビックリしちゃった。実はわたし、シヨリくんのことちょっぴり意識しちゃってる。だから本当はシヨリくんと一緒に登校したいけど、実はわたし、人には言えないヒミツがあって。だから今はちょっとだけ強がるの。

「大丈夫だよ。一人でちゃんと登校できるもん。わたし、もうお姉さんなんだから」

自信満々に胸元をたたいてみせると、お母さんは仕方なさそうに笑ってる。むぅ、全然信じてくれてない。

「もう、中学生になった途端に大人ぶっちゃって。まぁいいわ。それじゃ、気を付けて行ってらっしゃい」

「はーい」

さあ、気を取り直してしゅっぱーつ！

扉を開けば眩しい朝日。今日はなんだか良いことありそう！

＊＊＊

中学生になって初めての登校。道が変われば当然景色も違くて、とっても新鮮な気分。今日から毎日、この景色を見て歩くんだなぁ。友達と一緒に登下校したり、時には寄り道しちゃったりして。うんうん、青春って感じ。想像しただけでドキドキワクワクが弾けちゃいそう。

緩んだ頬をムニムニしながら、学校までの手書きの地図を確認してみる。普段は方向音痴なわたしだけど、今日は心配いらないよ。こうして地図も持ってるし、昨日は三時間も掛けて登校の予行練習をしたんだから。えぇと、次の信号を左、その次を左、その次は……。

……。

……。

……。

……ま、

「迷ったぁ～！！」

ちゃんと地図見てたのに、ちゃんと練習もしたのに、見覚えのない景色しか見えてこない！

なんでなんで！？ どうしてこうなっちゃったの！？ 地図を書き間違えちゃったのかな。どうしよどうしよ！ このままだと入学式に遅刻しちゃう！ こんなことになるなら、無駄な意地張らずにシヨリくんと来ればよかった！

どうしようどうしよう！このままだとわたし、わたしぃ……。

「あ！アカリ、こんなとこにいた」

「ふぇ？」

その声に振り返ると、シヨリくんが息を切らして駆けてきた！それまで泣くのをガマンしてたのに、思わず目から涙が溢れ出しちゃった。

「シヨリくん！ わたし、道に迷っちゃってぇ。知らないとこばっかで怖かったよぉ」

「はぁ、やっぱりな。お前の方向音痴は中学生になっても健在だな」

「もう！ からかわないでよ！ こっちは本気で怖かったんだから！」

「はは、悪い悪い。でも、見つかって良かった。おばさんに頼まれて探してたんだ。『あの子のことだから、どうせ迷子になって泣いてる。探してあげて』って」

「もう！ お母さんったらヒドい。」

「そう怒るなよ。実際迷子になってたんだから」

シヨリくんの言う通り、迷子になってたから言い返せない。悔しくて唇を噛むと、シヨリくんは優しく微笑んでくれた。

「さ、アカリも見つけたことだし、学校に急ごう。早くしないと遅刻だ」

そして彼は左手を伸ばす。キョトンとするわたしに、シヨリくんはこう言った。

「ほら、手。繋がないとまた迷子になるだろ？」

「あ、え、でも――」

「いいから」

シヨリくんはぱっとわたしの手を取った。わたしより少し大きくて、頼もしい手。シヨリくんと手、繋いちゃってるよぉ。

前髪越しに見上げると、シヨリくんとパッチリ目が合った。どうしよう、逸らしたくても逸らせない。シヨリくんの瞳に吸い込まれそう。

「ん、どした？お前は元気が取り柄のはずだろ？急にしおらしくなっちゃって」

「う、ううん。何でもない」

そう、何でもない、はずなのに。どうして胸の鼓動が止まらないの？シヨリくんの大きな手。その感触を実感する度に心臓が高鳴って、顔がどんどん熱くなる。どくどく、どくどく。激しく駆け巡る血の流れに目が回っちゃいそう。

「お、おい、アカリ。本当にどうした？ 顔赤いぞ。熱でもある

んじゃないか？」
　シヨリくんの右手がわたしのおでこに触れようとする。あぁ、だめ！　そんなことされたらわたし！
「ダメ！これ以上ドキドキしちゃったらわたし！　とにかく離れて！」
「何言ってんだよ。もしも熱があったら大変だろ。いいから、ほら」
「きゃぁ！」
　離れようとしても繋いだ手が離れない。そのままわたしはシヨリくんへと引き寄せられ、おでこ同士がくっついた。
　おでこ to おでこ。わたしの熱が、鼓動が、心が、シヨリくんに伝わる。すぐ目の前にシヨリくんの顔があって、吐息すら肌で感じられる距離にわたしたちはいる。
　意識せずにはいられない。わたしの鼓動はみるみる早くなる。
「アカリ、お前すごい熱じゃないか！　は、早く病院に――」
　シヨリくんの言葉を待つ前に、わたしは限界を迎えた。

　わたしは目と口をいっぱいに開き、全身の穴から鋭い光を放つ。それは前兆。遂に訪れる破滅の印、抑えきれぬエネルギーの奔流。もはやそれに抗う術はなく、わたしは内から湧き上がる熱に全てを委ねる他無かった。
「ア、アカリぃー!!」
　彼の姿は、その叫びと共に眩い光の中へ消えてゆく。
　時は来た。来てしまったのだ。
　わたしから解き放たれた計測不能なエネルギーの濁流は、一瞬にして地球の全てを包み込む。わたしの生まれ育った故郷、わたしを愛してくれた家族や友達、そして、わたしの大好きなシヨリくん。その全てを、わたしの熱が焦がし、溶かし、消し飛ばす。

　ちゅどーん！

　全ては一瞬の出来事だった。
　わたしの立つ大地は深く抉れ、かつての故郷は全て等しく均された。そこに、一秒前の面影はない。
「だから言ったのに……。わたしをドキドキさせたらダメだって」
　シヨリくんが立っていた方を向く。さきほどまで感じていた胸の高鳴りは、どんよりとした暗い気持ちで塗り固められていた。

（了）

平田　ヘイデン
コンパニオンバード

小鳥のヒナ飼えない？と友人から電話が来た。自分が住んでいるアパートはペット応相談なので、確認してから連絡するわ、と返した。

管理会社の営業時間を待ってから問い合わせると、小鳥は飼ってよいとの回答を貰うことができた。独り身も長くそろそろペットでも飼ってみようかと考えていたところだったので、早速友人に「飼える」と返事を送った。

その日の夜に綿毛を生やしたヒナに餌を与える親鳥の画像と、何羽欲しい？とメッセージが返ってきた。一羽貰うことにして、育て方や引き取りの日程を相談した。小鳥は文鳥という種類で、雌雄は成鳥にならないと分からないらしい。

だいたい一か月後、予定通り友人がヒナを届けに来た。友人は大事に抱えた小さなケージからヒナを出して、リビングに置かれたケージにそっと入れた。急に見知らぬ場所に入れられたヒナが怯えてケージの中でバタバタと暴れたので、落ち着かせるためにケージをタオルで覆って暗くした。

友人はしばらくうちで雑談した後、何かあったら相談してと言って帰って行った。その頃にはヒナも落ち着いたようで、時折鳴き声や物音が聞こえるだけになっていた。そっとタオルを捲ると、見知らぬ人間を目にしたヒナは体を縮めた。クチバシの基部に向かって黒から桜色のグラデーションが、柔らかそうな灰褐色の羽毛の塊からにょきりと生えている。可愛い。可愛いとしか言いようがない。

思考は可愛いに征服され、語彙は死んだ。

新しい環境に慣れてもらうためにケージから室内が見えるようにした状態で、この興奮が伝わらないようにその日はおヒナ様には構わないで過ごした。横目で様子を伺い過ぎたせいで目が痛い。

おヒナ様はカグヤ様と名付け、大事に大事に育てた。

掌に収まるサイズだったカグヤ様はすくすくと成長し、換毛が始まる頃にはケージの入り口を通れないくらい大きくなった。ケージを大型の鳥類用に買い替えた。甘えん坊に育ったカグヤ様だったが、換毛中はとても不機嫌で甘えてくれなくなり、寂しさに枕を濡らす日々が続いた。自分が落ち込んでいると、換毛中にも関わらず寄り添って慰めてくれた時には何に落ち込んでいたのか忘れるくらい嬉しかった。

灰褐色の羽根が少しずつ成鳥の羽根に生え代わり、体も順調に大きくなっていく。ケージが手狭になったので、寝室の家具をリビングに移動し、寝室をカグヤ様のお部屋にした。

二か月後、換毛が終わったカグヤ様は光り輝く青灰色の羽毛に桜色のクチバシが美しい成鳥になった。換毛期の頃の不機嫌さは羽根とともに抜けたようで、べったり甘えるようになった。腕に抱えるには大きすぎるサイズになっていたので、甘えるときは膝に乗り、クチバシを肩に乗せて密着するようになっていた。この体勢は足が痺れるが、自分の顔がカグヤ様の首辺りに埋もれるのである。香ばしい穀物のようないい香りとふわふわの羽毛が顔を包むのだ。天国はここにあった。全人類垂涎ものなのは間違いない。

カグヤ様は囀りも披露してくれるようになっていた。飛び跳ねながら得意げに囀ってくれるのは感激の極み。だがユーフォニアムのような低音がアパート中に響くので中古の一軒家を買って

引っ越すことにした。

壁や床をぶち抜いて間取りがワンエルディーケーになった一軒家をカグヤ様はお気に召したようで、嬉し気に飛び回っている。羽ばたきの風圧で荷物が入った段ボールが転がった。

順風満帆に思えたカグヤ様との生活だが、新居に引っ越してからは少し困ったことになっている。新居が職場から往復四時間かかるのと、残業を増やしたので家にいる時間が短くなり、カグヤ様の機嫌が悪いのだ。

家に帰ると寂しさが限界を突破したカグヤ様が怒り狂ってキャルキャルと威嚇してくるので、話しかけながらそっと近付いてスキンシップを取って宥める。基本威嚇だけだが、近寄る時に失敗すると突っつかれたり噛まれたりして痣ができたり流血したりする。

仕事で疲れた体を引きずって家に帰ると、今日もカグヤ様がお怒りだった。低い姿勢で威嚇してくるカグヤ様と目を合わせる。

「遅くなってごめんね。今日も仕事疲れたよ。昼間は何してたの？ごはん食べた？」

喋りながらおもむろに近寄って、威嚇が止んだことを確認してからカグヤ様に抱き付く。この頃には、カグヤ様の目線は自分が直立した時と同じくらいになっていた。カグヤ様の成長が止まらなかったら、もっと大きな家に引っ越さないといけなくなる。給料をもっと増やさなきゃ。でも残業するとカグヤ様が怒るし。仕事疲れた。

何も考えたくなくなって羽毛に埋もれたままぼーっとする。落ち込みを察したカグヤ様が囀り始めた。

制作・著作 MHK総合テレビ
文章 大野満
密着ドキュメンタリー番組
『テラの西日』（活字版）

【第三百二十六回】文学の暗殺者！
～小説家・天中頃ス密着インタヴュー～

「ワシが退屈な文学を殺すんじゃあ！」
そんな、熱き思いを胸に、今日も文学の荒野をひた走る男がいる。

某県某所。
寒風の吹きすさむ街角に、佇む中年男性。
「今日はよろしくお願いいたします」
彼はぎこちない笑みを浮かべながら、我々取材班を迎えてくれた。

天中頃ス〈あまなかころす〉・三十五歳
職業：小説家・エッセイスト
三十歳のときに長編小説『ネクロマンサーの炒飯』で「マガジン雑誌新人文学賞」を受賞。三十三歳のときに発表した長編小説『グッバイ六角レンチ』で「ヘッドエイク頭痛文学賞」を受賞。その他、既刊に『生娘・イン・ザ・シティ』『あばら屋物語』など。
文学界の一線で活動を続けている実力派の作家である。

「昔はもっとあったんですけど、二十代後半になってから急に、ね」
天中氏がすっかり薄くなった前髪をいじくる。近々、AGA治療を受けに行く予定なのだそうだ。

本日より、一週間。取材班は天中氏に密着取材を行う。
我々は、天中氏の住居兼仕事場に向かった。何の変哲も無い六畳一間のこぢんまりとしたアパート。ここで幾つもの作品が生み出されてきた。
「あの机で、いつも書いてるんですわ」
天中氏が指さした先には、折り畳み式の小さなデスクと、パイプ椅子。
「大きい机もええですけど、引っ越しするときに大変でっしゃろ。せやさかいに、私は宅急便で送れるサイズのモノしか所持せんようにしてますねん」
――もしかして、ミニマリスト？
「その世界に片足突っ込んでますなあ。モノがなければ散らかりようもあらへんでしょ」
言われてみれば確かに、布団や炊飯器など、必要最低限のもの以外は置かれておらず、少しもの寂しい感じさえしてくる。
物欲の無さは、独特の作品世界を作りだす秘訣なのだろうか。
「ホンマはタワマンとか住んで、高級品とか飾りまくりたいですけどね。金あらへんからしゃーないですわ」
――物欲が無いわけでは無かった。やはり芸術家の頭の中は計り知れない。

――執筆するのはＰＣですか？
「最初はね、紙の原稿用紙に万年筆使って書いとったんです。でもね、手にインクつくし、書き直すの大変ですさかいに、今はＰ

C使うてますわ」

――どのような工程を経て、作品の完成に至るのでしょうか？

「まずはアウトラインの作成ですねん。作品の全体像を見渡せるメモを作るんです。そうでないと、途中で何を書いているのか、わからんようになってしまいますねん。あと、文字数のアタリをつけたり、どれくらいの時間で執筆できるかの試算にもなりますねや」

今は次回作のアウトラインを作成しているらしい。モニターに表示されたテキストエディタには、いくつか見出しのようなものが並んでいた。

○寡黙な男が
○茶碗蒸しを食べ
○まろやかさが心の琴線、震わせて
○自分は愚民、と発狂
○大事な掛け軸を引き裂いた

――内容に全く想像がつかないのですが。

「ワシにも全くワケがわかりまへん」天中氏は笑いながら答えた。

「今はね、頭の中にある言葉を羅列して、想像を膨らませてますねや。なぜ、こないにワケのわからん言葉をわざわざ書くか、っちゅうとね、脳内にあるイメージを外部に出す必要があるからですねん。イメージは頭の外に出ると変質してしまうんですわ」

――イメージの変質？

「そう、変質しますねや。頭の中にあるイメージはね、頭の中では燦然と輝いていて、無限の広がりを見せてます。せやけどね、頭の中のイメージをそのまま他人の脳に伝えるっちゅうのは不可能です。だから、言葉や絵、音声やら映像やらで、イメージを伝達可能のものにして他人に伝えるわけでしょ。

しかし、伝達可能な形式に変換すれば、もともとのイメージが持っていた輝きや無限の広がりは損なわれてしまう。その輝きや広がりを失わないように、かつ、他人に伝えられるように変換するのが、芸術家っちゅうもんだとワシは思うてます。

でもね、退屈な文学っちゅうのは、この辺のことを全く考えてない。ただ文字が散らばってるだけですねや！ そないなね、退屈な文学をワシが殺すんじゃ、と思うてます、鱒、鱒、鱒ぅ！」

それだけ言い残して、天中氏は机に突っ伏して急に眠ってしまった。取材班は彼の背中にやさしくブランケットを掛けて、起床を待った。

やがて、むにゃむにゃと、天中氏が眠りから覚め、執筆を再開した。

「もう限界。今日はここまで！」

執筆から八時間。天中氏はついに作業を中断した。

――執筆の進捗はいかがでしょうか？

「まあ、ぼちぼちっちゅうところですわ。締切は明後日ですけど、まあ、間に合うでしょ。一応最後まで書けたんで、明日からは推敲ですね。一応言うとくと、推敲っちゅうのは、文章とか内容を修正するもんって、思うてもらえたらええですわ」

――いつも、執筆の後は何をしてらっしゃるんですか？

「ゲームしたり映画見たりして遊んでます。まあ、そない大層なことはしてませんで」
——食事は自分で作るんですか？
「まあ、自分で作ったほうが安いし、量もいっぱい出来ますからね」
——よく作る料理は？
「え、何言うてはるんですか？ワシ、料理作らないですよ」
——先ほどは自炊をするとおっしゃってましたが。
「そんなん言うてませんねんけど。勝手なこと言わんでください」
——天野氏には気難しい一面がある。そういった部分も作品の魅力の秘訣なのだろうか。

翌日、取材班は再び天中氏に会いに行った。
「立ち話もなんですし、お茶でもどないですか？ワシ、ええ店知ってますさかい」
そう言いながら、全国チェーンのコーヒーショップに入っていく天中氏はどこか誇らしげだ。
——いつから小説を書きだしましたか？
「たしか、二十三歳の時と違うかなあ。そのころワシね、芸人やってたんですが、全然売れへんから、やめたんですわ。ほでから、金もありまへんでしたし、暇やし、でなんか面白いことあらへんかなあ、思うて始めたんが執筆ですわ」
——リアルですね（笑）
「何笑うてんねん。文句あんのかぁ」
笑ったスタッフが格闘技経験者であることを伝えると、天中氏は地面に突き刺さらんばかりの土下座を披露してくれた。変わり身の早さも良い作品づくりに欠かせないのだろう。
——最初はどんな作品を書かれていたのですか？
「短編小説で、コンビニのアルバイト君が店長を殺しにいく話です」
——反響はありましたか？
「めちゃめちゃスベりましてね。まあ、今から思えば当たり前のことやったんですが、何の反応も無かったのがショックで、三年くらい小説書かれへんかったんです」
——また執筆を始めたのは、どうしてですか？
「二十五歳のときに、地元をはなれましてね、友達がおらんで退屈しとったんです。ほで、友達作ろ、思うて、文芸サークル入りましてんわ。ほで、みんなが書いてるの見て、ワシもまた書きたい、と。だからそのサークルには感謝してますねや」
挑戦、そして挫折、人との出会い。事実は小説よりも奇なり。人間の人生とは、それそのものが文学であり、物語なのかもしれない。

午後七時、作業場に戻った天中氏は、先日執筆していたエッセイの推敲に取り掛かる。
原稿の締め切りは翌朝に迫っている。
ＰＣの画面を見つめたまま、腕を組んで黙り込む。今、彼の頭の中では、言葉に輝きと光を取り戻すための壮絶な冒険が繰り広げられているのだ。
「ちょっと、スペース空けてください」

天野氏が作業場の床に、十円玉を大量にばらまいた。一体何が始まるというのか。

「ワンセッ、オー！しゅ、シュート！」

十円玉を使ったおはじきのようなゲームに一人興じる天中氏。

――推敲はしないんですか？

「これがね、ワシなりの推敲なんですわ。じっとしてても何もいいアイデアが、思いつかないんで。何かやっているときが一番閃くんですよ」

かれこれ、二時間が経過した。いつの間にか、天中氏が涙を流していた。

「全然なにも浮かばへんかった……。二十円くらい無くしたし」

しゃくりあげながらも、天中氏はＰＣの前に座る。どれだけアイデアが浮かばなくても、締切は待ってはくれない。

「書かなきゃ、書かなきゃ。退屈な文学はぁ、ワシが殺しゅんじゃあア」

そして、午前五時――。

「や、やっと出来ちゃぁ」

と、伸びをしたかと思えば、天中氏は床に倒れ込んだ。作品を生み出すために、全てのエネルギーを使い果たした証拠である。

完成した作品は『狂して走れ、街の角』と題されていた。

「あっ、失くした二十円、見っけ！」

天中氏と、退屈な文学との殺し合いはこれからも続いていく――。

「うーん、ボツ！」

プロデューサーの一声で、お蔵入りになる取材班の無念。（了）

# 喫茶店文芸

監修　マサユキ・マサオ
編集　氷川省吾

2021年6月号